

Title	実存と羞恥(III)
Author(s)	原, 一子
Citation	聖学院大学論叢,18(3) : 95-104
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=75
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

実存と羞恥 -

ニーチェ『ツアラトウストラ』に見られる羞恥の表現

原 一 子

Existence and Shame III

How Nietzsche expresses shame in *Also sprach Zarathustra*

Kazuko HARA

Since Ruth Benedict in her magnum opus, *The Chrysanthemum and the Sword*, characterized Japanese culture and European culture as a shame culture and a sin culture, respectively, a plethora of scholars have questioned whether or not she was correct in depicting sin as being strictly internal and shame as being external in nature. I classify shame as manifesting itself in three hierarchical dimensions: the physical, social, and existential. Social shame was analyzed in a previous article, as were Kierkegaard, Sartre, and Jaspers in reference to existential shame in another, and I herein continue my analysis of existential shame with reference to Nietzsche's work on the subject.

In particular, this article focuses on how Nietzsche expressed shame in *Also Sprach Zarathustra* (*Thus Spoke Zarathustra*). Actually, it is quite difficult at first to make order of the many fragmental references to shame in *Zarathustra*, so I have classified the "shame" expressions according to six themes: human essence, love of one's neighbor, the death of God, virtue, transcendence and the Fall, and beyond good and evil. According to Nietzsche, man is shameful, and the history of man is shame. He severely criticizes the love of one's neighbor, as sympathy fails to take into account man's inherent shame. Furthermore, Nietzsche asserts that God was killed because He sympathized with man without being conscious of shame. Thus, man must alone break the chains of shame and transcend toward becoming the Superman, with the goal of finally entering the uncharted territory of "no shame," as a newly born child.

Shame is a psychological phenomenon, which is inherently problematic to explain, and it is to be considered as one of the functions of self-preservation from Others or the watchful eyes of Others. This essay demonstrates that shame underlies the basic thought of Nietzsche and serves as the impetus for his criticism of Christian morals such as the love of one's neighbor, as well as his concept of the Superman.

Key words: 羞恥, ニーチェ, ツアラトウストラ, 隣人愛

ルース・ベネディクトが罪の文化と恥の文化という対比で西洋文化と日本文化を特徴づけて以来、その対照図式の鋭さが評価される一方で、果たして彼女の言う通り、罪が内面的規制原理であるのに対して恥は外面的であると単純に言い得るのかという疑問が提出されている。⁽¹⁾ 筆者は「恥意識に関する文化的考察序説」⁽²⁾において、人間が恥を意識する場面を、生理的・社会的・実存的の三つの次元に分けて考え、生理的羞恥心や実存的羞恥心は日本人にも西洋人にも同様に見られるのに対して、社会的羞恥の方は、その社会の文化的背景によって現われ方が多様に変化するのではないかと、との見解から、まず社会的羞恥の分析を試みた。また実存的羞恥に関しては、既にキルケゴール、サルトル、ヤスパースについて考察したので⁽³⁾、本稿ではニーチェを取り上げ、主著『ツアラトゥストラ』に見られる彼の羞恥の表現を分析する。

『ツアラトゥストラ』の冒頭は、ツアラトゥストラが30歳のある朝、曙光と共に起きて、太陽に向かって「お前、大いなる天体よ！」と呼びかけるところから始まるが、本書の末尾、第4部20節には、これに対応するように、旅支度をととのえたツアラトゥストラが太陽に向かって呼びかける場面が描かれている。彼はここで、太陽がもし、照らす対象を持たなかったら「一切のお前の幸福はどうなることであろう！」と言い、既に太陽が出ているのに人々がまだ寝ていたら、「おまえの誇り高い羞恥(傍点引用者)はそのことでどんなに腹を立てることであろう！」⁽⁴⁾と語りかける。われわれは、言われてみれば、独り太陽のみが照らし続け、光を享受して喜ぶはずのものが何者も姿を現さないときの、太陽の不満、白けた気分を理解できなくはないが、「太陽が羞恥する」という感性を持ち合わせているであろうか。ニーチェは羞恥の人である。

『ツアラトゥストラ』には羞恥に関する表現が極めて多く見られる。これは実存の内奥に横たわる、えも言われぬデリケートな感情に、ニーチェが極めて敏感だったことを物語るものと思われるが、彼の羞恥論は、従来、サルトルの羞恥論⁽⁵⁾ほどには取り上げられることがなく、引用もされてこなかった。それは、『ツアラトゥストラ』という書物自体が詩的で、論理性や体系性を欠き、前述のごとく、羞恥に関する記述も突飛な印象を与えるために、それを系統立てることや彼の主要思想に関連づけることが必ずしも容易でないためと思われる。実際のところ、羞恥の表現は本書全体に断片的に散らばっており、解釈の困難な箇所も少なくないが、本稿では、それを可能な限り分類整理し、秩序立て、彼の人間理解や他の主要概念との関わりにおいて解釈できればと思う。引用がいささか長くなる欠点を覚悟のうえで、ニーチェの生の声を聞きつつ、羞恥の表現を通じて彼が言わんとしたことを解明したい。

1. 人間規定

『ツアラトゥストラ』に羞恥に関する表現が最初に出てくるのは「序説」の3である。

ツアラトウストラは、市場に多数の民衆が集まっているのを見ると超人を説く決意をし、「人間は超克されるところの、何ものかである。」と語り始める。従来あらゆる存在者は自分を超え出る何ものかを創造した。人間は虫から人間への道程を成就した。しかし、市場の人間たちは自己を超克するために何をしたか。多くの者はむしろ動物へと後退することを欲し、今なお多くの者は虫であり、「いかなるサルよりも、より多くサルである。」と。ところで「人間にとってサルとは何であるか？ 一個のお笑いぐさ、あるいは一個の痛ましい羞恥（傍点引用者）である。そして超人にとっては、人間はまさしくそういうものであるはずだ。すなわち一個のお笑いぐさ、あるいは一個の痛ましい羞恥であるはずだ。」⁽⁶⁾

ここでまず興味深いのは、ニーチェにおいては、超人への自己超越という実存的な出来事が、個人としての人間よりもむしろ、種としての人間全体に関わることとして、動物 - 人間 - 超人という、いわば進化論的系譜によって説明されていることである。羞恥も、他者との共有を許さない、すぐれて内面的・個人的な感情であるはずだが、ここではニーチェは、人間というものを、その生物的本質からして構造的に羞恥を持たざるを得ない存在であると考えていたことが窺われる。ニーチェにとって羞恥は、個人的感情である以前に、人間の本質規定に関わるものと看做されるのである。

ニーチェは、人間を「一個の過渡」「動物と超人とのあいだにかけ渡された一本の綱」(序説4 - 2)⁽⁷⁾として規定する。人間が、神と獣、ないしは天使と悪魔の中間存在として把握され表現されることは珍しくはないが、そうした人間把握は、たいていの場合、人間が、神と獣、ないしは天使と悪魔に譬えられるような両極的な性質を同時に併せ持つという、二元論的な人間理解に基づくものであって、無時間的である。しかしニーチェはここで、人間というものを、いわば進化論的な時間論に立って、方向性を持ち進化し生成していく運動体として捉えている。

サルは人間にとって自己否定したはずのものである。しかし進化した生物は、前段階の生物の性質も併せ持つことから、人間にとってサルは単なる他者ではなく、理性的存在者であるはずの人間には、サルと同一の動物的な性質が内在している。人間はサルのうちに、自己否定したはずの自分を見るがゆえに、サルは「一個の痛ましい羞恥」なのである。

同じことが超人と人間との関係についても言える。第 部3「同情深い者たちについて」において、ニーチェは述べる。「人間そのものが、認識者にとっては、赤い頬を持つ獣なのだ。どうして人間は赤い頬を持つことになったのか？ 人間があまりにしばしば恥ずかしい思いをしなくてはならなかったからではないか？ 認識者は次のように語る。羞恥、羞恥、羞恥 これが人間の歴史なのだ！」⁽⁸⁾ そうした歴史を持つ人間は、超人にとってはまた、まさしく「一個のお笑いぐさ、あるいは一個の痛ましい羞恥」であり、ニーチェにとっては、これが人間の本質である。マックス・シェラーによれば、動物と神には羞恥はありえず、羞恥はその中間に位置する人間に本質的に纏わる特殊な感情であると言われるが、⁽⁹⁾ ニーチェにおいては、サルは人間から見れば羞恥の対象であり、その人間も超人から見ればまた羞恥の対象であるということになる。そしてツアラトウスト

ラもまた、人間を羞恥する。

2. 隣人愛

相手に恥ずかしい思いをさせることは、こちらにとっても恥ずかしいことである。それゆえ羞恥は、無神経な憐れみや同情に歯止めをかける。先に引用した第 3 部の「同情深い者たちについて」には以下のような言葉が続く。「それゆえ高貴な者は、自分〔の同情心〕を戒めて、ひとに恥ずかしい思いをさせないように心掛ける。高貴な者は、自分〔の同情心〕を戒めて、およそ悩んでいる者に対し羞恥を覚えるように心掛けるのだ。まことに、わたしは、同情することにおいて至福を覚えるような、あわれみ深い者（傍点引用者）を好まない。彼らにはあまりにも羞恥心が欠けているのだ。」⁽¹⁰⁾ ここでは、明らかに、「山上の垂訓（マタイ 5 - 7）」の「あわれみ深い人たちは、さいわいである。彼らはあわれみを受けるであろう。」が意識されている。ニーチェは隣人愛を批判して「助けようとしなさいことのほうが、助けようと跳んで行くあの徳より高貴であるかもしれぬ。」⁽¹¹⁾ と言う。

また、第 1 部「毒ヘビのかみ傷について」には「きみたちが敵を持っていたら、敵の悪に報いるに善をもってするな。というのは、そういうことをすれば、相手を恥じ入らせる（傍点引用者）ことになるだろうからだ。むしろ、敵がきみたちに何か善をなしたことを証明せよ。」⁽¹²⁾ 「相手を恥じ入らせるよりも、むしろ腹を立てよ！ かくて、きみたちが呪われるとき、わたしの気に入らないのは、きみたちが自分を呪う相手を祝福しようとするからだ。」⁽¹³⁾ という言葉が見られるが、これも「敵を愛し、迫害する者のために祈れ」（マタイ 5 - 44）という聖書の言葉を意識しての表現であろう。

ニーチェはキリスト教道徳を「奴隷道徳」「畜群道徳」として厳しく批判する。彼は、憐れみや同情に、不幸な他人の心の内に、時には相手の気持ちや無視して土足で踏み込むような無神経さや、押しつけがましさを、高みから手を差し伸べる傲慢さ、偽善性などが伴うことを鋭く見抜いている。そして隣人愛は、「隣人のために行為することはあっても、創造することはない」⁽¹⁴⁾ ような「小さい人々にのみ特有の徳」⁽¹⁵⁾ であるが、ニーチェにとっては、そういう徳が「今日では一切の小さい人々のもので徳そのものと呼ばれている。」⁽¹⁶⁾ ことは許しがたい状況である。

贈与の場合も同様である。ツァラトゥストラは、贈与するときには「友人として友人たちに（傍点引用者）贈与したい。」⁽¹⁷⁾ と言う。ところがキリスト教の隣人愛は、異邦人や貧しい者、乞食、見ず知らずの人をも隣人として愛せよ、と命ずる。だが、贈与に際しては本来、贈る側も「請い求める者たちの羞恥を察して涙に満ち溢れる」⁽¹⁸⁾ はずである。「贈与者でありながら羞恥心を失わないでいることは、きわめて困難なことなのだ。」⁽¹⁹⁾ だから「わたしは、悩んでいる者を助けた手を洗い、さらに魂をも拭き清める。というのは、悩んでいる者の悩んでいるさまを見たことを、わたしは彼の羞恥ゆえに恥ずかしく思ったからであり、また、わたしが彼を助けたとき、わたしは彼の誇りを

ひどく傷つけたからである。」⁽²⁰⁾

それゆえ「わたしは無縁の者たち、貧しい者たちは、自分でわたしの木から果実をもぎ取るがよい。そういうやり方は、ひとに恥ずかしい思いをさせることが少ないのだ。だが乞食どもは、残らず追い払うべきであろう！ まことに、彼らに与えるのも腹立たしく、また与えないのも腹立たしい。」⁽²¹⁾ 乞食は、受けることに羞恥を持たぬ者、自己に対する尊厳を失った者である。誇り高く高貴な魂は、乞食の卑屈な態度に羞恥し傷つく。贈与は贈与する者をも悩ませることになるので、それに慣らされてしまった「つねに贈与する者の危険は、羞恥を失うことである。」⁽²²⁾ 贈ることに慣れて鈍感になってしまった者、憐れみや贈与が相手を傷つけたことに気づかずに自己満足する者、反対に、与えられて当然とばかりに開き直る弱者は、いずれも羞恥を失っているが、隣人愛や博愛精神、あるいは福祉という名のもとに、そうした人々たちによる無神経で繊細さを欠いた施しや贈与がいかにも多いことか。ニーチェはそのような道徳に耐えられない。それゆえ彼は、ツアラトウストラに、「わたしが同情深くあらざるをえない場合にも、わたしはそういう者であると称されたくない。かくて、わたしがそういう者であるときには、遠くから（傍点引用者）そうでありたい。」⁽²³⁾ と語らせる。「わたしはきみたちに隣人愛〔最も近い者への愛〕を勧めるだろうか？それよりもむしろ、わたしはきみたちに隣人〔最も近い者〕からの逃避と最も遠い者への愛を勧めるのだ。」⁽²⁴⁾ なぜなら「隣人〔最も近い者〕への愛より、最も遠い者、来たるべき者への愛のほうが、より高い愛である」からである。ニーチェは、隣人愛とは反対の極に求められる新しい愛を「最も遠い者への愛」⁽²⁵⁾「来るべき者への愛」⁽²⁶⁾「大いなる愛」⁽²⁷⁾と呼び、「あらゆる大いなる愛は、……許しや同情さえをも超克するのだ。」⁽²⁸⁾と述べる。

3. 神 の 死

同情は、与える者にも受ける者にも羞恥を起こさせ、羞恥は、同情を抑える。「神の同情であろうと、人間たちのそれであろうと、同情は羞恥に反するのだ。」⁽²⁹⁾と言われるとおりである。それゆえ、羞恥を欠くと、同情は、神をも殺してしまう。『ツアラトウストラ』においては「神の死」に関する記述が9箇所見られるが、そのうち、神の死の理由が明記されているのは、第2部「同情深い者たちについて」と第4部「最も醜い人間」の2箇所で、いずれも同情が原因とされている。「同情深い者たちについて」では悪魔の言葉として「神は死んだ。人間たちに同情したために、神は死んだ。」⁽³⁰⁾とだけ簡単に記されているが、「最も醜い人間」のほうでは、神の殺害者に、「神は死ななくてはならなかった。彼は、……人間の隠された恥辱と醜さの一切を見たのだ。彼の同情は羞恥を知らなかった（傍点引用者）。彼はわたしの最も不潔な隅々にまで這いこんだのだ。この最も好奇心の強い者、あまりにも押しつけがましい者、あまりに同情深い者は、死ななくてはならなかった。」「こういう目撃者に、わたしは復讐したいと思ったのだ。」⁽³¹⁾と語る。

神は羞恥を知らなかったがゆえに、最も醜いものを見てしまい、殺されることになった。羞恥は醜いものを包むオブラートのようなものと言えるのだろうか。これを突破して人間の心底にまで介入してしまった者は、その報いも引き受けなければならない。

ツアラトウストラが、この神の殺害者、すなわち最も醜い人間に出会う場面の描写は壮絶である。彼がとある死の国へ歩み入ると、「人間のような姿かたちをしているが、ほとんど人間とは見えず、何とも言いようもないもの」が目にとまる。彼は「そのようなものを目の当たり見たことのゆえに、突如として大いなる羞恥（傍点引用者）に襲われた。赤みが彼の白髪までのぼるほど赤面（傍点引用者）して、彼は視線をそらし、⁽³²⁾ 立ち去ろうとするが、そのとき、「死せる荒れ地が声を発した。すなわち、さながら夜中に水が、詰まった水管を通るさい、がらがらごろごろと音を立てるように、がらがらごろごろと息も絶え絶えにのどを鳴らす音が地面から湧き起こった。』激しい羞恥を突き抜けてさらに進むと吐きけが襲う。そしてついにその音は人間の声と言葉になって、自分が何者が語って欲しいと呼ばわる。これを聞くと今度は、「同情が彼を襲った。」ツアラトウストラはぱったりと倒れるが、再び起き上がって、その醜い者が「神の殺害者」であることを言い当てる。

ツアラトウストラは羞恥、吐きけ、同情を克服して「最も醜い人間」を直視した。それゆえ最も醜い人間は、「あなたの羞恥は、……わたしに対する敬意を示すものであった。」⁽³³⁾ と語る。ツアラトウストラは「いったい人間は、……なんと醜く、なんと息も絶え絶えにのどをごろごろと鳴らし、なんと隠された羞恥に充ちていることか。」と心の中で考えた。「一切を、したがってまた人間をも見た神、この神は死ななくてはならなかったのだ！人間はこういう目撃者の生きていることに耐えられないのだ。」⁽³⁴⁾

4. 徳

ニーチェはキリスト教道徳ばかりではなく、一般的な道徳にも鋭いメスを入れるが、羞恥という言葉が登場するのは、第1部2節「徳の諸講座について」の、ある賢者による眠りについての講義の中である。ツアラトウストラは、人々から、眠りと徳についてうまく話すことで尊敬を受け、多大の報酬を得ている賢者を推奨され、話しを聞きに行く。賢者は、良く眠るための40か条を講義し、話しを聞き終えたツアラトウストラは、この賢者を「阿呆だ」と感じる一方で、眠りのような、およそ非生産的と思われる徳について語る賢者の知恵は「生がなんの意味も持たず、無意味を選び取らなくてはならないものとすれば、最も選び取るに値する意味あること」⁽³⁵⁾ だとも思う。

ここで賢者は、「眠りに対する敬意と羞恥！それが第一に大切なことだ！」と語り始め、「よく眠れないで、夜なかに目をさましている一切の者たちを、避けよ！盗人でさえ眠りに対して羞恥心を持っている。いつも彼は夜陰のなかをそっと忍び歩く。だが、夜番は恥知らずであり、恥知らずに自分の角笛を持ち歩く。」⁽³⁶⁾ と続ける。ニーチェ自身が実際に不眠に悩まされていたのだろうか、実

証研究を要するところだが、ここには、眠りに入ろうとして入れず、眠りから拒絶されて、まんじりともせず輾転反側する自分を恥ずかしいと感じる繊細な感情が表現されていて興味深い。盗人と夜番の対比は、他人の眠りや夜の静寂を平気で破る無神経な人の行動を恥知らずと表現したものであろう。夜の深い静寂には、それを破ることに気おくれさせるものがあるが、その気おくれの感情をニーチェは羞恥と表現したのであろう。現代人は特にそういう感覚に鈍感である。

第1部「歓楽と情熱について」では、徳の個別性が語られる。人が一つの徳を持ったとすれば、それは他者と共有できるようなものではない。ところが、「いまやきみは、その徳の名を民衆と共有しており、きみの徳でもって、民衆となり、畜群となっているのだ！……きみの徳は、なれなれしく名づけられるには、あまりに高すぎるものであるべきものだ。そして、きみがそれについて話さなくてはならないのなら、それについて口ごもることを恥じるな。」⁽³⁷⁾とツァラトゥストラは語る。

ニーチェはここで、畜群のような大衆に無反省に受容され、安易にすらすらと語られるような徳は本物の徳ではないとして、暗にキリスト教道徳を批判する。徳は、高貴な個人によって主体的に守られるべきもので、簡単には他者に語れないものである。それゆえ、ある行為の立派さが「徳」と呼ばれるためには、その行為の善さが、人倫組織の中で普遍妥当的に公認されることが必要だとするならば、ニーチェが言うような、他者と共有できず、他人に語ることも難しいような価値を徳と名づけることはできない。民衆の徳も、高貴な徳も、ともに「徳」と名乗ることができず、ニヒリズムが到来する。

ニーチェが「徳の諸講座について」においてことさらに眠りを取り上げたのも、眠りは常識的にはおよそ建設的とは言えず、生存に不可欠ではあっても徳とはいえないものだからであろう。

5. 超克と没落

人間は常に超克されるべきところの、何ものかである。人間は一つの橋、過渡であって目的ではないゆえに、安住と停滞、水平化、世俗的な幸福は常に戒められなければならない。そしてその自己超克には羞恥が伴う。現にある自己、すなわち、あるべき自己から離れてしまった自己を直視し、軽蔑することなしには、それはなし得ないからである。第1部「山の木について」で「わたしの軽蔑とわたしの憧憬とは、いっしょに成長する。わたしは自分の登高とつまずきをどんなに恥じて（傍点引用者）いることが！わたしは自分の激しい息づかいをどんなにあざ笑っていることが！」⁽³⁸⁾と言われる通りである。また幸運や安寧に満足してしまう自己も否定の対象であり、「序説4」では、「わたしは愛する、さいころの目が自分に幸いすると、恥じて（傍点引用者）、それから、いったい自分は一人のいかさま賭博者であるのか？と問うものを。 というのは、彼は破滅することを欲するのだから。」⁽³⁹⁾という表現が見られる。

弟子は、師から立ち去って孤独の道を一人で歩まなければならないし、師からの贈り物も否定さ

れなければならない時が来る。ツアラトウストラは「まことに、わたしはきみたちに勧める。わたしから去り、ツアラトウストラに抵抗せよ！そしてさらによいことには、彼を[・]恥[・]じよ（傍点引用者）！……」⁽⁴⁰⁾と弟子たちに語る。これは「誇る者はキリストを誇れ」という聖書の言葉をもじったものであろうが、ニーチェは、教説も師弟関係も固定されてはならず、古い真理が崇められ続けることは思想の大衆化、墮落の道であることを示そうとしているのであろう。それゆえ「わが最愛の者たちでさえ、わたしが彼らに与えた贈り物を[・]恥[・]じなくてはならない」⁽⁴¹⁾時に、「来るべき幸福が曙光のようにツアラトウストラの顔容に照りは映えていた」と描写されている。

超克に伴う自己否定、自己軽蔑をニーチェは没落と呼ぶ。ニーチェによれば、人間は木と同じく、高みと明るみへ登り行こうとすればするほど、その根は地中深く、暗黒や悪へ向かうとする。だから孤独な自己超克を果たそうと高みに登って行く自己には、いつも、ニーチェが「市場のハエ」と呼ぶ、追従者、寄生者がつきまとう。「きみたちの怨恨と不満のなか、きみたちの敏感な[・]羞恥（傍点引用者）のなかに、寄生者はその吐きけを催させるような巣を作るのだ。強い者の弱い箇所、高貴な者のあまりに柔軟な箇所、そのなかへ、寄生者はその吐きけを催させるような巣を作る。偉大な者の、小さな、傷ついた隅々に、寄生者は住んでいるのだ。」⁽⁴²⁾「この最高の魂が、どうして最悪の寄生者たちを持たないはずがあるのか？」⁽⁴³⁾人間は、こうした大衆化、水平化の危険に曝されながら、なおも超克と没落を繰り返し、そのたびに激しい羞恥を経験するのである。

6．終わりに、そして羞恥の彼岸

羞恥は、ニーチェの理想とする新しい道徳や超人への道程で、積極的な役割を持つものといえるが、その羞恥も最終的には克服されるべきものと考えられていることが、本書の4箇所の記述から窺われる。

第1部「戦争と戦士たちについて」には「わたしはきみたちの心の憎悪と嫉妬を知っている。きみたちは憎悪と嫉妬を知らないでおれるほど偉大ではない。さらば、それらを[・]恥[・]じない（傍点引用者）でおれるほど偉大であれ！」⁽⁴⁴⁾、第2部「最も静かな時」では、声なき者とツアラトウストラとの対話の中で、「わたしは答えた。『わたしは[・]恥[・]じる。』すると、再び、声なき声[・]が[・]わたし[・]に[・]向[・]か[・]つ[・]て[・]語[・]つ[・]た。『おまえはまだこれから子供になって、[・]羞[・]恥[・]を[・]な[・]く[・]さ[・]な[・]く[・]て[・]は[・]（傍点引用者）ならない。』⁽⁴⁵⁾と表現されており、さらに第3部「大いなる憧憬について」には「おお、わが魂よ、わたしはおまえから小さな[・]羞[・]恥[・]と片隅の徳を洗い落とし（傍点引用者）、かくておまえを説得して、太陽の目の前に裸身で立たせた。」⁽⁴⁶⁾、そして第4部「覚醒」には、「吐きけがこれらの高等な人間たちから退きつつある。……あらゆる愚かな[・]羞[・]恥[・]は消え去り（傍点引用者）、彼らは心の中をぶちまける。」⁽⁴⁷⁾という言葉が見られる。ニーチェにおいては人間の精神が、らくだ 獅子 幼児と変化することが説かれるが、ツアラトウストラに求められるのも、最終的には、幼児のような生の絶対肯定

なのである。しかしそれは、初めからの破廉恥ではなくして、幾多の自己否定、羞恥の苦しみを乗り越えた超えた末に行き着く境地であるといえるのだろう。

こうして見て来ると、ニーチェにおいては、羞恥は、彼のキリスト教道徳批判を背後から支え、高貴な人の人間関係、すなわち「主人道徳」を可能にする根本感情であると言っても過言でないかもしれない。

また羞恥は、人間が超人へと自己超克する際に突破しなければならない、一種の障壁のようなものであることが分かる。自己否定をするときに、人間は、見たくない醜い自己を見せつけられる。羞恥には、その自己が剥き出しになるのを防ぎ自己を保護する機能があるといえるが、ふとしたことから、拒絶され疎外されている自己や、期待するありようから離れてしまっている自己が顕わになると、人は羞恥、時には吐きけさえ覚える。羞恥は「ありたい」自己と「である」自己のギャップの意識であり、それを経験するのはつらいことであるが、それを克服することで超人に至る強い自我を確立することができるのである。その意味では、人間が過渡であり超克されなければならない存在であるのと同様に、羞恥もまた、精神の成熟の過渡にあつて超克されなければならない心理であるといえるのだろう。自他の区別がやっとなつてきた幼児が人見知りをし、思春期の青年がしばしば羞恥に敏感であるのも、羞恥が、自我の確立や精神の成熟に深く関わる、過渡の心理現象であることを物語るものといえようが、このことが本書では見事に語られている。

ニーチェは本書の至るところでキリスト教を批判するが、『ツァラトストラ』には、単に「キリスト教」対「超人の思想」というような二極的な図式が語られるのではなしに、人間存在の構造や自己認識、精神の発達に関する鋭い洞察が見られ、人間心理についての天才の繊細な感性をそこに見てとることができるのである。

今回は羞恥と嘔吐との関係について追究できなかった。ニーチェとサルトルの比較分析は今後の課題としたい。

注

- (1) 作田啓一氏は、ブルジョワであることを恥じる場合や、ドミトリー・カラマーゾフが友人から託された金を放蕩に費やす際に、その金を半分残しておいたけちくささに対して恥じた例などを挙げ、恥には公恥（publick shame）とは区別される内面的側面 羞恥（私恥）があることに着目した。（『恥の文化再考』筑摩書房 1978, p.10）
また森三樹三郎氏は中国語に恥に関する表現が豊かなことを指摘し、恥の本場はむしろ中国だと述べている。（『「名」と「恥」の文化』講談社現代新書, 1978, p.155-156）
- (2) 拙稿「恥意識に関する文化的考察序説 日本人の恥意識と同質的社会」聖徳栄養短期大学紀要 No.17, 1986, p. 79 - 88
- (3) 「実存と羞恥 存在の超越的構造と恥意識」聖学院大学論叢 第6巻, 1994, p.41-50, 「実存と羞恥 ヤスパーズ羞恥論の実存論的 存在論的意義」『コムニカチオン』Vol.8, 1995, p.2-14, 「ヤスパーズの羞恥論 自己存在の構造と羞恥心」聖学院大学論叢 第7巻 第2号, 1995, p.135-144

実存と羞恥 -

- (4) F.Nietzsche., Also sprach Zarathustra, Neuausgabe, 1999, DTV GmbH, S.40 以下NZと省略。
- (5) J.P.Sartre, l'être et le néant ; Editions Gallimard,1943.
- (6) NZ S.14
- (7) NZ S.16
- (8) NZ S.113
- (9) Max Scheller, Über Scham und Schamgefühl, Schriften aus dem Nachlass, 1957 (シェーラー著作集『羞恥と羞恥心』白水社シェーラー著作集15, p.30-32)
- (10) NZ S.113
- (11) NZ S.330
- (12) NZ S.109
- (13) Ibid.
- (14) NZ S.362
- (15) Ibid. マタイ伝5 - 19には「これらの最も小さいいましめの一つでも破り,またそうするように人に教えたりする者は,天国で最も小さい者と呼ばれるであろう。」という言葉がある。
- (16) NZ S.330
- (17) NZ S.114
- (18) NZ S.137
- (19) NZ S.105
- (20) NZ S.114
- (21) Ibid.
- (22) NZ S.137
- (23) NZ S.113
- (24) NZ S.77
- (25) NZ Ibid
- (26) NZ Ibid.
- (27) NZ S.115
- (28) NZ Ibid.
- (29) NZ S.330
- (30) NZ S.115
- (31) NZ S.331
- (32) NZ S.328
- (33) NZ S.329
- (34) NZ S.331
- (35) NZ S.34
- (36) NZ S.32
- (37) NZ S.42
- (38) NZ S.52
- (39) NZ S.17
- (40) NZ S.101
- (41) NZ S.106
- (42) NZ S.261
- (43) Ibid.
- (44) NZ S.58
- (45) NZ S.189
- (46) NZ S.278
- (47) NZ S.387